

LESZEK MOZDZER

レシェック・モジジェル

ジャズやクラシック、現代音楽、舞台音楽など、多方面でその才能を発揮するポーランドのトップ・ピアニスト、レシェック・モジジェル。ソロ・ピアノ公演のため、6年ぶりの来日を果たした彼に音楽観や最新作の魅力などについて聞いた。

取材：早田和音

取材協力/写真提供：ポーランド広報文化センター

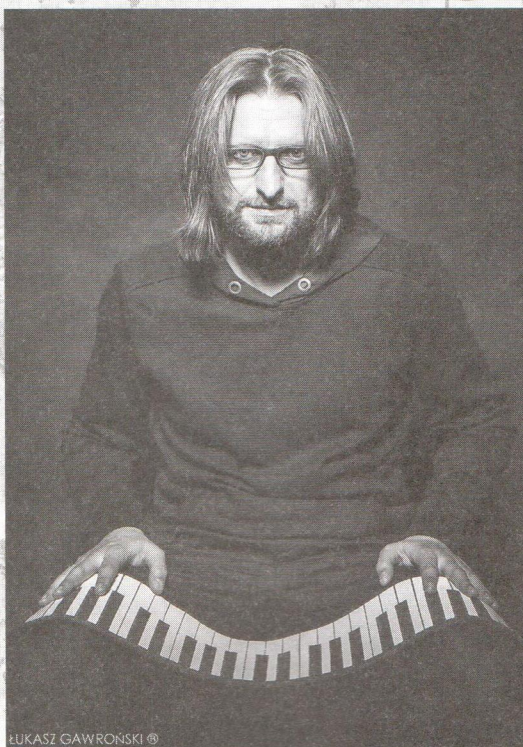
—どのようにして音楽やピアノと出会われたのですか？

レシェック・モジジェル(以下LM)：父がヴァイオリンの教師をしていたので音楽との出会いはとても早く、気が付けば家にはいつも音楽が流れていたように思います。そのせいでしょうか、5〜6歳の頃には音楽に限らず、耳に聴こえるすべての音が音楽のように感じられるようになっていました。ピアノとの出会いもその頃。ある日、たまたま知人からピアノを譲ってもらうことができ、家にピアノがやって来たのです。すぐさま見よう見真似でそのピアノを弾くようになりました。中でも夢中になったのは、ラジオから流れてくる音楽を耳で聴き取ってピアノで真似て弾くこと。それ以来ピアノが私の生活の大半を占めるようになりました。

—ジャズとはどのように出会いましたか？

LM：ジャズに出会ったのは、グダンスク音楽アカデミーに通っていた18歳の時。とても新鮮に感じました。それまで私が学校でずっと勉強していたクラシックの音楽家たちは、すでに亡くなっている過去の存在。それに対してジャズは、同時代を生きるミュージシャンが作っている音楽です。まさに今の音楽として私の耳に飛び込んできました。クラシックにはない躍動的なリズム。どのジャズ・ピアニストにも独自の音楽言語が感じられ、その演奏からは個性が溢れ出ていました。自分らしさを音楽の中でどう表現するかということに大きな関心を持っていた私は、すぐさまジャズの世界へと飛び込んでいきました。

—クラシックとジャズの両面から音楽に取



ŁUKASZ GAWRONSKI ©

り組んでいるあなたの演奏を聴いていると、ふたつの音楽の間にある垣根が切り崩されていくような爽快感を覚えます。

LM：そう言ってもらえると嬉しいですね。調和に満ちたクラシックの音楽と、自由に溢れたジャズ、相反すると思われているそのふたつを一緒にして新しい音楽を生み出していくのが私の夢のひとつですから。でもそのためには克服しなければならないことがいくつもある、なかなか大変です。

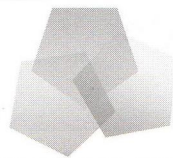
—どのような難しさがあるのでしょうか？

LM：クラシックとジャズのそれぞれに難しい点があるのですが、ジャズをフォルムの点から考えた場合、エモーションを優先させ過ぎるとフォルムが崩れやすくなるという点です。クラシックで用いられる音色をキープしたままジャズとして表現するには、演奏している時の自分の感情を客観的に把握し、それをしっかりとコントロールする必要があるように思います。

—今回はソロ・ピアノ公演でしたが、昨夜披露されたショパンの曲のいくつかは、ある時はとても伝統的かつ流麗、またある時は大変斬新な響きを醸し出していました。

相反すると思われているクラシックとジャズを一緒にして、新しい音楽を生み出したい

Leszek Mozdzierz & Friends
Jazz at Berlin Philharmonic III
Lars Danielson
Zohar Fresco
Atom String Quartet



『Jazz at Berlin Philharmonic III』

Leszek Mozdzierz & Friends

ACT Music 9578-2 ※海外盤
ベルリン・フィルの本拠地、ベルリン・フィルハーモニック・ホールにおいて、ラーシュ・ダニエルソン(b) & ザハール・フレスコ(ds)、そして弦楽四重奏団とのアンサンブルでライブ収録された作品。
※収録曲などの詳細は88ページを参照。

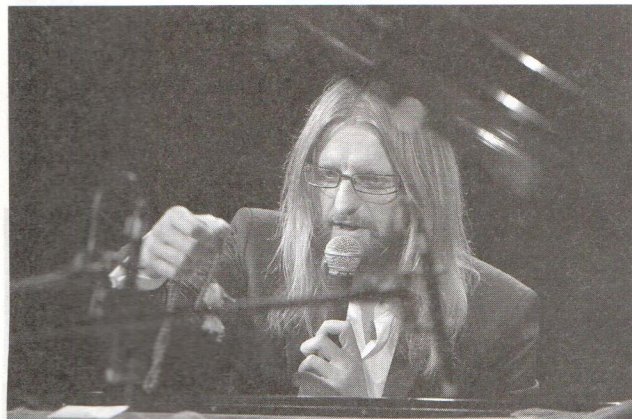
LM：ショパンの曲を演奏する時に一番大事なものはピアノの響きです。彼の作品は完成度が高いので、曲によっては一切インプロヴィゼーションを入れずにそのまま弾く場合もあります。ですが、それ以外の時はいつもショパンをモチーフにして自分独自の音楽を表現するようにしています。

—その中でピアノ本来の美しい響きと同時に強い印象を与えたのが、時折用いていたプリバド奏法(ピアノの内側に金属や布などを入れて音色を変化させる奏法)でした。

LM：プリバド奏法はある偶然から始めたものです。ある日、練習中に鉛筆がピアノの中に落ちてしまいました。その鉛筆が落ちた状態で弾いたピアノの音がとても面白く感じられたのです。それ以来この奏法にチャレンジしています。この奏法の利点は、ピアノの音色を変化させられること、打楽器的效果を加えられること。ピアノのサウンドに少し違うカラーを入れることによってその音楽に新たな意味合いを与えられる点が大きな魅力です。

—最新作『Jazz at Berlin Philharmonic III』はラーシュ・ダニエルソン(b)、ザハール・フレスコ(ds)とのインタープレイがとてもスリリングなライブ盤となっています。

LM：この作品は、ラーシュ&ザハールとのトリオによる4作目のアルバムです。長年一緒にプレイしていますが、ふたりとも最高のプレイヤーです。サウンドが美しく、テクニクもずば抜けているのはもちろんですが、何より嬉しいのは音楽的な考え方がとてもよく似ている点。サインなどを出さなくても、互いにテレパシーのようにして相手のことを理解し合いながら演奏を進めることができます。このアルバムからもそれが感じられると思いますので、ぜひ聴いてみてください。■



profile レシェック・モジジェル
1971年グダンスク生まれ。5歳でピアノを始め、1996年グダンスク音楽アカデミー卒業。クジシュトフ・コメダ賞(1992年)をはじめ多数受賞。パット・メセニー(e)、トーマス・スタンコ(tp)、アナ・マリア・ヨベック(vo)ら数多くのトップ・アーティストと共演。アカデミー賞作曲賞を受賞した映画「ネバーランド」の演奏にも参加するなど、ジャズ、クラシック、映画・舞台音楽で幅広い活動を展開している。
<http://www.mozdzierz.com/>

2016年3月9日 丸の内コットンクラブ
撮影：米田泰久/提供：COTTON CLUB